
学生さんの異世界物語

夢幻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学生さんの異世界物語

【Nコード】

N0878X

【作者名】

夢幻

【あらすじ】

これは少し不思議な世界の物語。科学と魔法の両方が発展し、それぞれの文化が入り混じった社会が形成される世界でのお話。そんな世界の大学に通う主人公アルレスは大した特技を持たない、本当にただの学生。別に勇者になるわけでもなく、世界を救う訳でもなく魔法使いになるわけでもなく、ただただ平凡に暮らそうとする彼。そんな彼の日常生活を描いた物語。

登場人物紹介（前書き）

一応登場人物の紹介を載せておきます。

登場人物紹介

アルレス・サマカー

性別：男

職業：大学生

得意なこと：特になし

この物語の主人公。取り柄は無し。作ろうともしない。

ドラゴンが大空を飛び、ある程度の人々が魔法を使える異世界の大学一年生。

いつ仲良くなったのか分からないが友達は数えられるぐらいいる。

ルタルフ・ボレアリス

性別：女

職業：大学生

得意なこと：魔法を使うこと 着ぐるみ着ること

主人公の知り合い。名前にかわいさを求める女性。

主人公と同じく異世界の大学一年生。主人公が所属する学部とは違う「魔法学部」に所属している。一年間浪人している。

着ぐるみの頭だけを被ることが趣味。その種類は実家で育てている動物たち。ただし、デフォルメ化がされている。

使用可能な魔法は「四属性初級魔法」。

スライム・カトウ

性別：不明（本人いわく男寄り）

職業：大学生

得意なこと：伸びること　くつつくこと　吸収すること

主人公の知り合い。突然変異したスライムの内の一匹。

主人公と同じ学部学科の大学一年生。「興味があったから」この学科を選んだらしい。

会話は片言だが可能。移動は腕を使って行う。この際、体から腕を生やしているが、そういった部位を生やすことは一部分しかできない。簡単に言うと、足のように二つ生やすことはできないということ。

全身が吸引能力を持っており、ゴミだらけの体になることを嫌がる。

一番目 テスト開始前

時計の長針が「4」を指そうとしていた。短針は「10」を超えたあたりにある。

その下には様々な落書きという名の化粧が施された黒板が存在していた。その近くには男性数人がそれぞれ参考書を片手に話し合っている。ときどきチョークを持って黒板に何か書いているところを見ると、おそらく最後の確認と言ったところだろう。

それにしても遅い。

「それで結局公式を抑えとけば点数は稼げるのかっ!？」

「ああ先輩から聞いた。何でも教科書のここの部分の公式の証明が丸々出るらしいぜ」

「本当かよ、ミスったらお前ジューズ一本おごりな」

「はあ? 問題一問でジューズ一本はおかしいだろ」

周囲では最後の悪あがきとも言わんばかりの必死の行いが繰り広げられている。中にはそれすらも諦めて、ある程度友人から重要な部分を聞きながら、携帯電話をいじるという強者もいる。範囲の確認、公式の確認をひたすら友人たちに聞きまわる者もいる。話しかけられる側からすると迷惑だろう。

俺は机の上に置いておいた鞆をどかし、鞆の中から参考書を取り出すと机の上に適当なページを開いた。昨日一応全ての公式を確認、証明と解き方もほぼ覚えることはできた。あとはそれが最中に問題なく出てくることを祈るだけだ。

参考書には講義中にシャープペンシルで、マークのつもりで引張ったミミズのような線が書いてあった。その線はそのページの複数の文にまたがっており、どこが重要なのかさっぱり分からない。考えられるのは睡魔と闘っていたときの線だということ。ため息を吐く代わりに肩を落とし、視線を時計に移した。

時計の長針が「5」を指そうとしていた。

突然ドアが勢いよく開いた。部屋の中にいた俺も含め他の人達もその音に驚きを隠せず、動かなくなった。部屋に入ってきたのは紫色のローブを着た老人だった。自慢の白髭は天然なのかくるりと一回転して顔の外側まで伸びている。この老人が俺のこの講義の教授。教授は左脇に何十枚も重なっていると思われる書類を抱えていた。教授はゆっくりと落ちて着いた雰囲気ですべて部屋前方の中央の位置まで足を進める。左わき腹に抱えていた書類を立ち止った位置に設置されていた机の上に勢いよく、それはまるで叩きつけるかのように置いた。

と同時に俺も含め他の人々はまるでスイッチを入れられたかのようにならに動き始めた。俺は参考書を鞆の中に急いでしまい、代わりに筆記用具を取り出し机の上に置いた。これで準備万端と思ったその瞬間に出し忘れていた物を思い出す。再び鞆の中を探り、財布を手に取ると中から学生証を取り出し大慌てで机の上に置いた。

「始まる前にトイレに行くようになあ」

教授が俺たち全員に注意を促す。財布を鞆の中へ入れたあと、俺は時計の長針を確認するが「5」と「6」の間にあった。間に合わない方が怖いかもしれない。大丈夫だ、何とかなる。こんな感じで自己暗示をかける俺であった。

それにしても遅い。まさか来ないのか。

前方から一枚の紙が配られる。筆記用具からシャープペンシルと消しゴムを取り出し、今か今かと待つ。そして、その声は開始の時を告げる。

「はい、テストを始めてください」

「じゃあな」

「うん、じゃ」

正門の前で友達に別れを告げた。

これからテストを受けに行く人間、たった今テストが終わった人

間。その両方が入り混じり、正門の前も後ろも大混雑である。さらに、正門だけにとどまらず正門の前を走る道路は何千と言う歩行者で埋め尽くされていた。途中で退出しておけばよかったと心から公開する俺だった。肩掛けの鞆を自分の体に接触するように寄せて、なるべく自分の体が歩行者に当たらないようにし、俺は歩き始める。家は正門から西の方角。歩いて五分の位置。八畳間の部屋を借りているだけだが、今は外にいるよりもそこに居たいと思う気持ちの方が強い。

なるべく体を小さくしても当たる人には当たるものでその度に「すみません」と俺は聞こえているか分からないが謝った。そもそも小さな声で謝っているから聞こえていないのかもしれない。

いつもよりも長い時間をかけて到着したアパート。正門の道から一本逸れた道に面しているためそこまで人は歩いていない。胸をなでおろし、とりあえずアパートの入り口にある自分の部屋番号の郵便受けを確認することにする。

「ん？　なんだこれ」

郵便受けには封筒とも手紙とも違う紙切れが一枚入っていた。よく見るとノートの紙切れのようで、半分に折られている。紙切れには「アルレスへ」と書かれていた。少し怪しく思ったが紙切れを開いて、中に書かれている内容を読む俺。

「突然俺の部屋に、異世界からの人が転生してきたので、しばらくその人と旅に出ます。友と教授にもそのことを伝えといてください。フォーマルより」

俺はこの手紙とも言えない紙切れに向かってため息を吐いた。そして、郵便受けの前からアパートに面する道路の脇へ移動し、紙切れを片手に空を見上げた。

轟音とも表現できるその咆哮はまさに空を支配する者の証だろう。空にはその元気を体で目いっぱい表現したいのか、縦横無尽にドラゴンが飛び回っていた。

二番目 レジに並ぶ前

それでもそこにそれは無かった。

ずらりと並ぶそれらは果てしなく左右に広がっている。棚に詰め込まれたそれらは上下に段を作り出し、上段の果てには高すぎて目が届かない。その棚の前を左右に歩き、何度も同じ場所を往復する。分かっているはずなのに認められないその心が足を動かす。

何度訪れても、目に映る光景は何も変わらない。

「あっアルレス君」

突然の声に驚き、とっさに辺りを見回す。その様子はまるで何かをしでかそうとして見つかる犯罪者そのもの。声をかけてきた人の姿をすぐに捉えることはできたのだが、その人が俺を見る表情は呆れていた。

「ルタルフさん、じゃないですか」

「その一瞬の間は何よ。どうしてそんな反応になるの」

「いや誰だってその恰好を見れば、なると思います」

ルタルフという名前を持つ女性の様子は、身体全てを覆い尽くす灰色のローブを羽織り、首には金色の首輪。それだけならまだいい。驚くべきなのは頭の装飾品。顔を出すただけに作られた穴が空いた、巨大な着ぐるみの頭。白い生地に黒の巨大な斑点。愛らしい二つの目玉と上に突き出た雄々しい角。何を表現したいのか理解はできなかったが、デフォルメと化した牛の頭である。

それを被って今、俺の目の前に彼女はいる。

「今日は私の実家の牛の誕生日なのよ」

「そうですか」

「……何を買いに来たの？」

「雑誌です、月刊の。でも毎回と言っていいほど発売日に本屋に置いてなくて」

「大人の事情なんじゃないかなあ」

俺はあるとすればそこにあるはずの場所の周辺で、探し物をひたすら探しながら話を進める。指で一つ一つ他の雑誌を指しながら確実に無いことを確認する。もうこれで最後にしよう。

「そうですね。まあ新しく出ていた漫画もありましたから。別に損はしてないですよ。では、これで」

そう言っただけはルタルフさんとの会話と、無いはずのものを探すという行為を中断し、レジへと足を進めた。

途中、山積みになされている小さい文庫本に左腕を直撃させるというアクシデントを起こしたが、そのあとは素早くレジに向かって移動した。背後でルフタフさんに何か言われたような気がしたが、たぶん「あほみたい」とかそういう類だろう。

目の前が黒で塗りつぶされているようだ。

何のためにここに来てまで使役されているのだろうか。何人かの客が並べるはずのそこには一人だけ。マナーであるがゆえに仕方なく俺は文句を言わずに後ろに並んでいる。俺の目の前には、漆黒と言わんばかりの色をしたタンクトップの巨大な客が並んでいた。ざっと二メートルぐらいだろう。しかし、それでも小型の部類だ。

「まだ買っただけだったの？」

「えっ!？」

突然の呼びかけ。こういう類にはめっっぽう弱く、驚いたその拍子で左手で掴んでいた本を危うく落とすところだった。どうやらルフさんが背後から俺の背中を見て、声をかけてきたようだった。ちょうど俺の後ろにルタルフさんは並び、俺の前にいる客をじろじろと見ながらこうつぶやいた。

「あら、ゴーレムを使う客が前にいるのね。これはひよつとしたらお嬢様クラスのお買い物かもね」

「おかげで並び始めてから五分は経過しました」

「でも、仕方ないよ。そういうもんだもの」

「ですよ」

ため息を吐く俺。ふと、ルタルフさんが両腕で抱えている本に目が留まる。「それは？」と単刀直入に俺は尋ねた。「この本のこと？」と言うと、ルタルフさんは笑顔でこう答えてくれた。

「私も休日間に能力を向上させようかと思つて。ほら、大学には魔法専門校から進学してきた子もいるから、その子たちに追いつけるように頑張ろうかなあなんて」

「魔法の練習をする本なんですか」

「そうよ、この一冊は」

奇妙な語尾がついたことに俺は気がついた。この一冊。どう見てもルタルフさんの持っている本は一冊しかない。その言い方ではまるで他に異なるジャンルの本を購入しようとしているようである。謎を解くために考えにふけっていると「アルレス君、前空いたわよ」と、ルタルフさんに注意をされてしまった。

俺は慌ててレジの前まで進み、持っていた漫画本を係りの人に手渡した。右手に持っていた財布の中から銅貨を五枚を一枚ずつ確認しながら取り出す。そして、レジのカウンターの上に五枚あることが分かり易いように置いた。

「銅貨五枚ちょうど頂きます。商品と、レシートです」

銅貨を出すのに手間取っていた分、商品を袋に入れてもらう方が早く終わっていた。財布の中にレシートを入れて、商品を受け取り、財布をしまふ。こういう一見すると単純に見える行為が俺はスムーズにこなせない。いわゆる不器用。今も最終的には財布にレシートを無造作に突っ込み、商品を左手でもらいレジを去るという行動で収まってしまった。

「じゃあね」

「あ、はい」

ルタルフさんに挨拶され、それを何気なく返した俺。その際に彼女の方を見るのだが、俺の目には先程彼女が言っていた意味が分かる光景が映った。

風の魔法だろうか。彼女の後ろには本が数冊飛んでいた。いや、浮いているが正しいだろう。一列でふわふわと浮くそれは、いわゆる魔法の無駄遣いであることに間違いはないだろうと俺は心の中で思った。

ついでに、それもゴーレムと同じくらい迷惑だろうと心の中で突っ込んでおいた。

三番目 正門を通る前に

空には自らが王であることを証明するために咆哮を続けるドラゴンが飛ぶ。地上の道路には科学の力によって動く車と同列に、その巨体を見せつけるゴーレムが並ぶ。通りには様々な種族がお互いの道を許し、また尊重し合い罵ることなく歩き続ける。

「あ、カトウさん」

「こんにちは」

近所に借りているアパートから大学までの道は歩いて五分。人通りの多い道を通らなければならないが、近道と言えば近道である。大学の周辺であるがゆえにほとんどが賃貸住宅と化しているが、ちらほらと飲食店などのお店は見える。

そして、俺は正門を通ろうとしていた。そのとき、正門の前で同じ学部学科の知り合いに出会った。なんてことはない雑談を繰り広げる。

「テストどうでした？」

「中、ぐらい」

「俺も同じですよ」

「単位、頑張る」

片言に言葉を返す彼。名前を「スライム・カトウ」と言う。

名前が既に姿を現しているが、彼はスライムである。ただ、大学側もその存在を認めるほどの突然変異体だそう。本人いわく「吸収力を知識の面に生かした」という内容の言葉を片言に話してくれるだけで、真相は分からない。高さは大体五十センチメートルぐらい。横幅は三十センチメートルぐらい。体色はスタンダードな緑色。目玉は黒く楕円を描いた感じ。かわいい部類に属するかもしれない。

「行きましょう」と声をかけて、カトウさんと俺は大学内に入る。歩幅、というより進める幅は大体三十センチメートル。方法としてはカトウさんの体から腕を作り出し、それで地面を蹴ると言うもの。

「足を作れば楽なのは」と言っと、どうやら一本しか生やせないらしくバランスが取り辛いとのこと。

「一限目はどうですか？ 調子」

「まあまあ。あー、そちらは？」

「同じですねえ。一応昨日勉強はしましたけど」

数分後、俺とカトウさんはテストを受けるために指定された教室に到着した。各々指定された席に座ってテスト開始までの時間、復習やら知識の確認やらをこなす。

数分が経過。そして、テストは始まる。

「どうでした？」

「体、汚い」

俺とカトウさんは、お互いの席で荷物を片付けている。ほとんどの生徒はさっさと荷物を片付けて帰って行った。カトウさんが荷物を片付けて俺に近づいてきた。けっこう机と机の間が狭く引っかかりながらもだが。

「……大変ですね、その体」

「消しカス、くつつくから、嫌」

「帰ってシャワー浴びるべきですね」

「そうする」

カトウさんの体にはテスト最中に発生したと思われる消しカスがこびりついていた。ゴミから生まれた魔物みたいになっている。

こう言ったカトウさんのようなスライムは他にもたくさん存在する。だが、皆共通点として吸引力を体全身に持っているらしく、そんな彼らが大学内を移動するので大学内は皮肉にも清潔が保たれている。

俺は、ゴミと一体化したカトウさんと共に、ほとんど誰もいない教室を急いで後にした。

四番目 注文を頼む前に

ふいに何かを炒めるような音が聞こえた。

こんがりとはまだはいかず、ここから段々と変わっていく焼け具合を楽しむような、そんな音。俺は何の音だろうと、音の元を周囲から探そうとした。違うことではあるが気づいたことが一つあった。

カトウさんの姿がない。必死でカトウサンを探す俺。

後ろにいた。

「焼けます」

「カトウさん、こういう天気弱いですもんね。夏もそろそろ終わりだから我慢です、我慢」

「焼けます」

今日の天気は雲の存在を一つも感じさせない晴れ。ここまで雲が無いとお日様はシャイになるどころか、はしゃぎ回り全身を露わにしていた。

大学内は残念ながらコンクリートとレンガを組み合わせた道路しか存在しない。さらに、付け加えると建物の素材も例外ではない。逆に草木が生える場所は無いのか。これは否定することができるが、そこはまず道ではない。このような構造で熱を持ちやすい大学内であることが災いし、カトウさんが焼けるという事態を引き起こす。

俺は干からびかけているカトウサンの近くに駆け寄り、自分の影がちょうどカトウさんに重なるようにするためだ。実はこれが意外と難しい。高さは無いのだが、横幅があるため入らない部位が存在する。

「大丈夫、大丈夫です」

「さっさと帰りましょう。今日はこれで終わりですから」

「あ、アルレス君じゃん」

「その声はっ」というありがちな反応よりも「その姿はっ」という方が俺としては正しい。俺の目の前には、着ぐるみの顔だけを被

った女性が自転車にまたがっていた。

「なんで、ルタルフさんがこの学部の自転車置き場に？　ここ学部違いますよね」

気になることを単刀直入に聞く俺。即答で返してくるルタルフさん。

「ちよつと行きたいところがあつてね。一緒に来る？　おいしい料理の店なんだけど」

「カトウさん、どうします？」

「行く」

「だそうです」

カトウさんはまるでゾンビの如く地面を這いずるように動いていた。ルタルフさんのカトウさんを見る目が突然変化した。まるで何か見てはいけないモノを見てしまったような目だ。どうしたのだろう。おそろおそろ口を開くルタルフさん。

「その人……じゃなくてスライム、大丈夫なの？　早く水でも飲ませたら？」

「だったら早く行きましょう。水ならお店で出るでしょう。というわけで俺の自転車のかごに乗ってください。カトウさん」

「水、飲みに行く」

そう言うカトウさんの言葉を無視し、俺はカトウさんを抱えると俺の自転車に向かって走り出した。再び自転車にまたがって俺が戻ってくるまで終始、ルタルフさんは嫌な顔をしていたらしい。

「この店のすごいところは、魔法で全部メニューが出てくるらしいの」

「全部が全部ですか？　相当高等な魔法使いが経営者なんですね」

「生き返った」

店内は明るい雰囲気音楽がかかり、どこか喫茶店を思わせる内装をしている。従業員から空いた席に案内してもらい、俺とカトウ

さんが隣り合うように、俺たちの向かい側の席にルタルフさんが座った。その席のテーブルの上には、すでにメニューを載せたパンフレットが開けられていた。

そして、すぐに従業員の人が注文を取りに俺たちの席にやってきた。

「あ、アタシこれ食べたい」

「え、じゃあ俺はこいつで」

「これ」

「かしこまりました。ご注文の確認をします。アノキノコのカルボナーラが一つ。ベヒモス肉のカレーが一つ。天然ネバネバドリンクが一つ。以上でよろしかったですね」

注文の確認が終わると「しばらくお待ちください」とだけ言うと、従業員は姿を消した。

待っている間の時間が暇である。この時間を有意義なものにするために、気になっていいることを解決することを思いついた。実は今日の着ぐるみの頭がずっと気になっているのでルタルフさんに聞いてみることにした。デフォルメがきつくかかっているせい何か分からないときが、たまにある。

「その頭ってなんですか？」

「え？ カメレオンだけど」

「カメレオンですか？」

即答で返ってきた答えは カメレオン。

分からないのも当然だ。あのギョロツとしているはずの目玉は完全にくりくりの丸い黒目になっているし、口の部分にルタルフさんの顔があるせいで、自慢の舌が顔である。ヒントとなるのは着ぐるみの色だけかもしれない。そんなわずかなヒントでもカメレオンは出てこない。

「何でカメレオンなんですか？」

第二の質問は第一の質問の答えから生まれた、当然誰もが聞きたくなる質問である。それにも即答で返してきたルタルフさんの答え

はこちら。

「今日ね、実家で一匹生まれたんだって。親父たちからさ、携帯のメールで報告が朝届いたんだあ」

そう言いながら携帯電話を取り出す彼女。俺はすかさず「いや見せなくていいです」とその行動を妨害した。

そういえば、カトウさんが注文の時から一言も離さないのので何をしているのかと思いきや、コップの水をがぶ飲みしていた。コップの水はもうほとんど残っていない。

「お客様、テーブルの上から手を離してお待ちください」

突然渋い男性の声が聞こえた。どこから聞こえているのかさっぱりだったので、俺は周りを見回してしまった。しかし、分からない仕方ないのでテーブルの上から手をどかし膝の上に置いた。

するとまるで、それを見ていたかのように、次の瞬間テーブルの上に料理が現れた。

「うわっ」

思わず声を上げる俺。

「すごい」

感激の念を伝えるルタルフさん。

「水、おかわり、ください」

一人水のお代わりを求めるカトウさん。

三者三様のリアクションをとる俺たちであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0878x/>

学生さんの異世界物語

2011年10月7日03時20分発行